

実学に関する学術研究の変遷 ～1980年代以降の研究に関するテキスト分析を中心に～

寺嶋正尚・白土由佳・齊藤ゆか

要旨

本論文は「実学」に焦点をあて、「実学を対象とする学術研究」について考察するものである。1980年以降の研究の傾向分析を行った。1980年代以降を教育改革に基づき3つのフェーズに分け、実学に関する学術研究のタイトルのテキスト分析を通じ、実学研究の変遷を明らかにした。実学に関する全体的研究から個別分野の研究へ、理論研究から実践研究へ、実学を実現する教育に関する研究へ、という流れを確認した。

キーワード：実学、実学教育、実学研究、テキスト分析、源了圓

1. はじめに

「実学教育」は、近年多くの大学が掲げる教育方針の一つである。「実学主義」「実学志向」など、様々な用語で「実学教育」が喧伝されている。神奈川大学を例にとると、「100周年に向けた将来像（ビジョン）」に「（前略）多様な価値観の共存する時代に、人の交流と文化の融和、知識と実践の循環、教育と研究の融合による21世紀における『真の実学』を実現し、地域社会そして地球規模の課題を解決する（後略）」とある。今や「実学」は、広く一般に使用される用語と解釈できる。

では、「真の実学」のいう「実学」とは何を指すのか。「真の実学」でない「実学」はあるのか。「真の実学」と判断される基準やゴール、そこへ向かう方途は不明瞭と言わざるを得ない。

これまでの多くの研究者は、この実学及び実学教育に関する学術研究を行ってきた。我が国で「実学研究」というと、先ず福澤諭吉が想起される。福澤（1942：12）は『學問のすゝめ』で、「ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作る」などの学問を、「世上に実のなき文学」「日用に間に合わぬ（学問）」と称した。要は、「実のなき学問」に対峙する学問として、「実学」が浮かび上がる構図である。続けて福澤は、「……今かかる実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」⁽¹⁾とした（小林2020）。

実学研究の大家である源了圓は、同領域に関し、2つの著作『近世初期実学思想の研究』（1980年）、『実学思想の系譜』（1986年）を記した。前者の源（1980）は、日本、中国、朝鮮⁽²⁾における実学研究の系譜を記している。このように源は実学研究に関して、1980年代までの研究を相当程度カバーした。しかしながら1980年以降は、源（1980）、源（1986）に匹敵する、実学研究の流れを網羅した研究は見受けられない。

本研究は、「実学」研究に関し、主として1980年以降の傾向分析を行うものである。そのため、まずは日本における実学研究に関する関連文献収集を行う。それらを踏まえ、本研究では、1980年以降の

実学研究に関する学術論文及び書籍等を分析対象に、1980年から2024年に至る期間を3区分し、その期間ごとの実学研究の特徴を考察する。その手法として、実学研究に関する論文タイトルを列挙し、テキスト分析用ソフトウェア KH Coder（樋口2020）を用いてテキスト分析を行う。本研究で分析対象とする論文タイトルのように、数量化されていないデータに関し、どのような傾向があるのかを探索的に分析する手段としてテキスト分析は有効である。テキスト分析を通じて、論文タイトルに表れる学術的関心の変遷を明らかにする。

2. 実学及び実学教育に関する先行研究

近年、実学及び実学教育に関する研究にはどのようなものがあり、また現在に至るまで、時代に応じてどのような変遷を辿ってきたのか、以下整理する。

(1) 実学の定義に関する研究

考察に先立ち、実学及び実学教育に関する先行研究を整理する。

実学及び実学教育の定義や系譜を体系的に論じたパイオニア的存在は、近代日本思想史を専門とする歴史学者・源了圓である。源は実学研究に関し、源（1980）、源（1986）の2冊を著したが、定義に関するものは主として後者である。これに拠ると、「日本では『実学』というとき、実証性と合理性に裏づけられ、実際生活に役立つ有用な学問、というような意味」が定着しているとする。また実学は、「虚学・偽学に対する『内容がある真実の学』（real and true learning）であり、またそれ故にそれは有用性を持つという基本的性格」があるとした。さらに実学という言葉には、「実際の役に立つ utility を持つ学問、実用的 pragmatic な学問、また現実的な、即ち actual で real な学問、あるいはまた実践的 practical な学問あるいはまた場合によっては実証的な positive な学問、というようなさまざまのニュアンスを持つ内容が含意されている」とし、「実学は虚学に対するものであり、実学の実は虚に対する実 true、real なのである」、「real なものを善しとする精神的態度、価値評価の上に成立した学問であり、広い意味での啓蒙的精神の一表現」であるとした。日本の実学の特色として、「社会的機能が比較的によく発揮され」ている点を挙げた（源 1986：212, 331, 334）。

井下（2001：51-52）は、前述した源了圓らの先行研究を踏まえた上で、実学の定義付けを行い、「実学とは、『実学的【態度】』という意味を最大限尊重して、『現実の生活に役立つような理論と実践、研究と実生活との関連づけ』『実証的・合理的な発想にもとづく現実主義、現場主義、現状改善、問題発見・解決志向性のあること』を表現するものとしたい」とした。さらに実学概念を研究し続けてきた埜上衛の「四位一体説」や、その節の礎となった国文学者・伊藤正男の「三種の実学」を基に、実学という言葉には4つの側面があるとした。「第1は、『実利・実益の学』である。第2は、『実験・実証の学』、第3は、『実行・実践の学』、そして第4にそれら3つの側面を統合するとともに共通した基盤としての『近代的批判的知性と独立の精神』」とした。また実学教育に関しては、「実学志向の教育・研究とは何か」とし、「実学的な発想や視点で物事を観察し、実験・実証を重ねて、行動的かつ実践的な教育研究を展開し、実際の役に立つことを志向すること」とした。

また近年の研究では、村越（2009）は、一般的な国語辞典に掲載された実学の定義を22件取上げ、そこから基準を抽出し、それら基準の根底に「practical=vocational」なる基本原則があるとした。また同論文では、大学教育における実学教育の在り方及び実施する際の留意点等について論じている。有賀（2024）は渋沢栄一に焦点をあて、渋沢が、論語における孔子の言葉等を基に述べた実学の概念を整理している。また儒学に関し、「儒学は『修己』が実心で、『治人』が今日言う実学なので、『正徳』が実心にあたり、『利用・厚生』が実学なのであり、このように儒学は実心・実学である。換言すれば、今

の実用の学には「実心」がない。経済学で言えば、実学はホモエコノミカス、実心はホモソシアリスということになろう。ホモソシアリスのない実学ばかりでは駄目だというのが、儒教の実学なのであり、これを敷衍して『実心実学』と呼ぶのである」としている⁽³⁾。謝（2019）は、前述の源（1986）の視点を用いて、日本近世本草学史⁴⁽⁴⁾を考察したものだが、「近世前期本草学の『実学』的特徴は、人間の外部における形而下的な『物』に対する認識を極めることを通じて、自ら内面における通達と真実に到達すること」であるとした（謝 2019 : 178）。そして稻生若水及び貝原益軒の2人の本草学者を例に、近世前期本草学の特徴を論証した。また高橋（2022）も謝（2019）同様に、源（1980）の議論をベースに「実学」に関する考察を行い、今後の「実践知」の在り方について論じている。

このように実学及び実学教育に関する学術的研究は、これまで数多くなされてきた。そして現在もなお行われている。その多くの研究においてベースとされ、引用されているのが、前述の源（1980）、源（1986）である。これら著作が、その後の実学研究に与えた影響は計り知れない。

本研究は、上記源（1980）、源（1986）が著された1980年代以降に焦点をあるものである。1980年代までは、これら両著作が相当程度カバーしている。しかしそれ以降に関しては、近年高校や大学等の研究機関で実学教育の実施の必要性が叫ばれているにも関わらず、あまり整理されていない。実学研究の論文及び書籍のタイトルに焦点をあて、それをもとに近年の実学研究の傾向や特徴を探るのが本論文である。

（2）歴史的に見た実学の変遷

前述の通り、本研究は1980年以降における実学研究を対象として、その特徴等を分析するものであるが、そもそも実学研究がいつの時代から始まったのかは抑えておく必要がある。他の先行研究同様、源（1980）に拠ると、表1のように整理される。同表は「中国、朝鮮、日本で、『実学』という用語を使った人、もしくは特別にそういう用語を使わなくても実学思想と深い関係を持つ人、ないし日本の実学思想との対比において重要な意味を持つ人」の名前を年代順に記したものである。

これを見るとその原点は、中国北宋時代の儒学者・程伊川に求められる。程伊川の本名は程顥、伊川は号である。兄の程顥とともに二程子と称され、朱子学・陽明学の源流の一人とされる。源（1980）は、中国の実学思想を、第1期（宋・明）、第2期（明末・清初）、第3期（清の大部分の時期）、第4期（清末）の4つに分け、第1期における研究は、「人間的真実追求の実学」「道徳的実践の実学」であるとした。そしてこのタイプの実学は程伊川によって唱えられ、胡至堂、呂東菴、張南軒等の宋学者に受け継がれ、それを大成したのが朱子である、とした。「朱子の実学概念は、人間的真実の追求、ということを核としながら、人間の社会生活に必要な実事における実用性、またそれを実現するための実践という諸契機を包蔵している」とした（源 1980 : 71-73）。

一方、源（1980）は、日本における実学思想の展開も4つの時期に大別した。第1期は近世初頭の藤原惺窓から萩生徂徠の出現に至るまでの江戸前期、第2期は萩生徂徎から会沢正志斎の思想活動の始まる1820年頃までの江戸後期、第3期は1820年代から明治維新に至るまでの時期、第4期は明治以後、である。実学研究の黎明期である第1期に焦点をあてると、「第1期の特色は、人間の内面的真実を追求すれば、それが経世済民につながるという人間の内面性に基調を送実学（人間的真実追求の実学、道徳的実践の実学）が支配的であることである。このタイプの実学には、朱子学、陽明学、及び古学の一部（伊藤仁斎）が含まれる。」とした（源 1980 : 91）。

なおこのあたりの実学に関する研究は、源（1980）以外の研究も数多く存在する。その代表的なものを見ると、島崎（1965 : 169）は、近世前期における「経世済民」論を考察したもので、儒学者・山鹿素行について論じている。そして「真の実学——聖学は、周公・孔子への道の復帰である。」とした。吾妻（2009 : 49）は、江戸初期における学塾の発展状況を考察したものだが、江戸時代における朱子学

表1 実学研究に関わりのある人物

中国		朝鮮		日本	
人名	年	人名	年	人名	年
程伊川	1033-1107				
朱子	1130-1200				
陸象山	1139-1192				
王陽明	1472-1528				
王竜溪	1498-1583				
		李 淩（退溪）	1501-1570		
		李 琦（栗谷）	1536-1584		
高攀竜	1562-1626	李晽光（芝峰）	1563-1628	藤原惺窓	1561-1615
徐光啓	1562-1633	金 增（潛谷）	1580-1658	沢 麻	1573-1645
黃宗羲	1610-1695			林 羅山	1583-1657
顧炎武	1613-1682			中江藤樹	1608-1648
王夫子	1619-1692			山崎闇齋	1618-1682
				熊沢蕃山	1619-1691
		柳馨遠（礪漢）	1622-1673	山鹿素行	1622-1658
梅文鼎	1633-1721			伊藤仁斎	1627-1705
顏 元	1635-1704			貝原益軒	1630-1714
				西川如見	1648-1724
				佐藤直方	1650-1719
				新井白石	1657-1725
				荻生徂徠	1666-1728
				伊藤東涯	1670-1736
				大塚退野	1676-1750
		李 漢（星湖）	1681-1763	太宰春台	1680-1747
				石田梅巖	1685-1744
				平野深淵	1706-1757
				富永仲基	1715-1746
戴 震	1723-1777			三浦梅園	1723-1789
				中井竹山	1730-1804
		洪大容（湛軒）	1731-1783	中井履軒	1732-1817
		朴趾源（燕岩）	1737-1805	杉田玄白	1733-1817
				本多利明	1744-1821
				山片蟠桃	1748-1821
		朴斎家（楚亭）	1750-1805	海保青陵	1755-1817
		丁若鏞（茶山）	1762-1836	藤田幽谷	1774-1836
				帆足万里	1778-1852
		金正喜（阮堂）	1768-1856	広瀬淡窓	1782-1856
				会沢正志齋	1782-1863
				大塙中斎	1793-1837
魏 源	1794-1856			渡辺華山	1793-1841
		崔漢綺（惠尚）	1803-1877	高野長英	1804-1850
				藤田東湖	1806-1855
				島津吝彬	1809-1858
				横井小楠	1809-1869
				佐久間象山	1811-1864
曾國藩	1811-1872			元田永孚	1818-1891
				西村茂樹	1828-1902
				西 周	1829-1897
				津田真道	1829-1903
				吉田松陰	1830-1859
李鴻章	1823-1901			橋本左内	1834-1859
				福沢諭吉	1835-1901
				中江兆民	1847-1901
				小野 梢	1852-1886
康有為	1858-1927			田口卯吉	1855-1905
				志賀重昂	1863-1927
				徳富蘇峰	1863-1957
章炳麟	1868-1936			北村透谷	1868-1894
梁啓超	1873-1929				

資料：源（1980）pp. 68-70

の受容と発展に対し、藤原惺窩及びその高弟の林羅山等が与えた功績等について記している。「藤原惺窩たちもまた朱子学にもとづく新たな教育・教養の形成を模索したのであるが、注意したいのはその場合、中国や朝鮮の影響や対比を常に考慮に入れる必要があるということである。」とした。また千葉（2009：273）は、吾妻（2009）同様、江戸時代における経済思想について整理したものだが、「徳川時代の儒教思想の展開については、日本政治思想史における次のようなシューマが定着している。」「それは藤原惺窩・林羅山によって日本的に定式化された朱子学が、伊藤仁斎の古義学と山鹿素行の実践的な学問に分化し、それが萩生徂徠によって集大成されていくというものである」とし、また江戸後期の商人兼学者であった山片蟠桃について触れ、「(前略) 蟠桃の思想は、後年の福沢の『実学』の思想を先駆する。ただし福沢の実学が『一身独立』のためのものであったことと比較すると、蟠桃の実学観は『忠君仁義』のためにあるべきだという当時の儒教観の範囲内にあった。」とした（千葉 2009：278）。

このように見えてくると、わが国の初期実学研究は朱子学と大きな関わりをもっていたこと、またその朱子学の教育という側面をもちつつ、わが国ではかなり早い時期から、実学教育がなされてきたことが分かる。近年多くの大学により「実学教育」の重要性が叫ばれ、その実施が志向されているが、実はわが国では非常に古い時代から、実践的な教育がなされてきたと言える。

以上、実学及び実学研究に関する先行研究を考察してきた。前述したように、これまで実学及び実学教育に関する学術的研究は、1980年代以前のものに関しては源（1980）、源（1986）の両著作が相当程度カバーしていると判断できる。

(3) 教育行政の視点からみた実学の扱い

近年の実学研究は、文部科学省の教育改革に影響を与えた、また逆に教育改革による影響を受けた、と考えられる。実学研究と実学教育は、強い関係性がある。そこで、教育行政の視点から、実学の扱いを簡略的に整理する。

まず、文部科学省「人文学及び社会科学の振興に関する委員会の資料」（2007年7月23日）によれば、「人文学及び社会科学の振興に関する委員会における主な意見」において、「大学の社会的意義、役割」及び「専門職大学院等について」の項目に、「実学」が明記されている（文部科学省 2024a）。例えば、「大学の社会的意義、役割」は、「『実学をきちんと行うこと』と、『すぐに役に立つ実務知識を教えること』との間には大きな差がある。『実学』とは、現実に根ざした学問、現実と深く関わろうとする学問であり、社会における大学の存在意義は、このような意味での『実学』を教育、研究面から担うことにある。」としている。また「専門職大学院等について」は、「『実学をきちんと行うこと』と『すぐに役に立つ実務知識を教えること』との間には大きな差がある。単純な実務知識の切り売り機関ではいけない。」「専門職大学院については、単なる実務的な知識や資格試験のノウハウの伝授ではなく、しっかりと教養を身に付けさせることで、教養あるプロフェッショナルを育成していくことが求められている。」（「実学」に下線）とする。

次に、文部科学省・教育課程企画特別部会の資料（2015年8月20日）によると、「学習活動の示し方や『アクティブラーニング』の意義等」が記されている（文部科学省 2024b）。これを見ると、「思考力・判断力・表現力等は、(中略) 思考・判断・表現が發揮される主体的・協働的な問題発見・解決の場面を経験することによって磨かれていく。」とする。また、「学びを推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力であり、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する必要がある」とする。いわゆる「アクティブラーニング」は「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」を指し、「これまでの議論等も踏まえつつ検討を重ねてきた。」としている。

このように文科省の関連資料にて「実学」「実学教育」が散見される。また、教育政策においても、

「実学」「実学教育」が明記され、今日の初等・中等教育の現場でも日常的に実学が教育実践されている。また、高等教育において、近年多くの大学において実学教育が志向されている。

尚、筆者ら⁽⁵⁾もこれまでそれぞれ専門分野から、実学教育に関する実践研究成果を蓄積してきた。

3. テキスト分析による学術論文・実践論文の傾向分析

本研究では、1980年以降の実学研究について、その特徴の経年変化に着目する。具体的には、1980年以降の実学研究に関する論文や書籍を分析対象として、そのタイトルに関するテキスト分析を行い、時代区分ごとの傾向を明らかにする。論文タイトルという、研究が最も端的に表現されたテキストの分析を通じて、実学及び実学教育への学術的関心の変遷を明らかにする。

(1) 分析対象データと時代区分

分析対象は、1980年以降に公開された実学及び実学教育に関連する論文および出版された書籍タイトルのテキストである。学術情報検索データベース CiNii によって提供されている Open Search API⁽⁶⁾を使用し、「実学」を検索キーワードに用いて 2,206 件の論文等を取得した。これらの論文等のうち、学会大会名に一部「実学」が含まれるのみで、直接の関連性に乏しい大会報告要旨、新聞記事、書評、CiNii のシステム上重複して登録されている論文等を分析対象外としてデータクリーニングした。分析対象は計 702 件となった。分析対象テキストの例を表 2 に示す。

表2 分析対象テキストの例

年次	タイトル（分析対象テキスト）	著者	掲載誌
1980	「実学」観の政治的位相	山室 信一	社會科學研究
2007	ロボットを通した実学	鶴志田 英樹	日本ロボット学会誌
2016	産学・地域連携 PBL による実学教育の試み	古川 修ほか	工学教育
…	…	…	…

分析の視点として、1980年以降現在に至るまでを三区分する。第1フェーズは1980年から2000年までの20年間であり、本格的に教育改革が始まる以前の時代として位置付けられる。第2フェーズは2001年から2010年までの10年間であり、教育改革に伴う実学教育が普及した時代として区分される。第3フェーズは2011年以降現在に至るまでの14年間であり、知識、道徳、体力のバランスが取れた、生きる力の育成を目指す教育を志向する時代として位置付けられる。第2フェーズ以降、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を推奨する、実学を伴う学び方は、高等教育においても志向されるようになった。

このように、教育のあり方を鑑みた時代区分に基づいて分析することで、実学及び実学教育に関する研究がどのように変化しているのか、あるいは変化していない部分があるのか、学術的な関心の推移を捉えていく。

(2) 1980年以降現在に至るまでの時代区分

分析対象データの年次ごとの件数を図1に示す。横軸に論文及び書籍の公開年次、縦軸に論文および書籍数を表しており、第1フェーズはグラフの斜線網掛け棒、第2フェーズは黒網掛け棒、第3フェーズ灰色網掛け棒で示している。

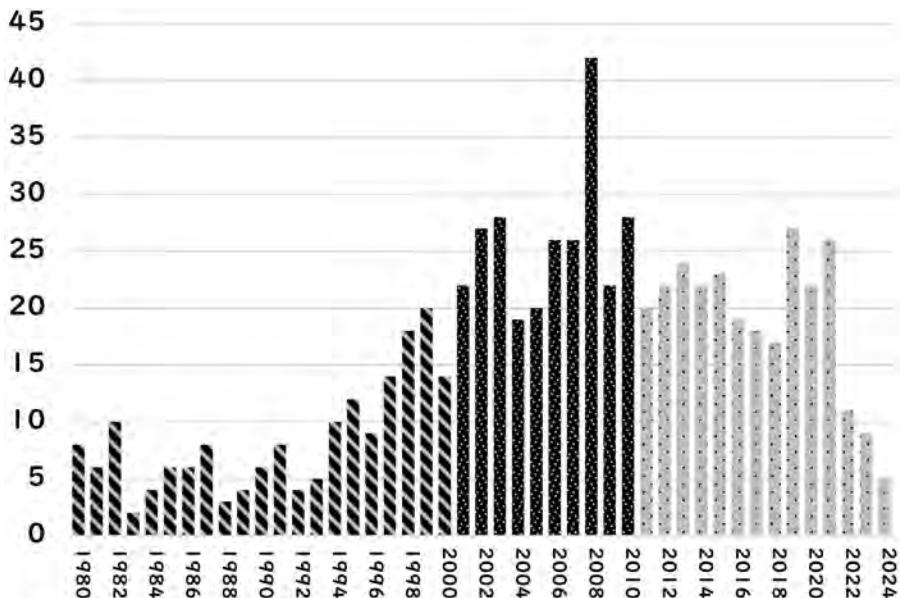


図1 年次ごと、時代区分ごとの分析対象データ件数

分析対象とした702件のデータは、第1フェーズ177件、第2フェーズ260件、第3フェーズ265件に分けられた。第1フェーズを見ると、1980年から1994年までは年間の論文及び書籍数が10件以下と低い数値で推移している。1995年からその件数は増加基調となったが、第2、第3フェーズに比べると、論文及び書籍数は決して多くない。対して、第2フェーズは年間の論文及び書籍数が概ね20件以上と相対的に高い水準で推移している。特に2008年は1980年から2024年までのうち最も件数が多く、実学への学術的関心の高さが窺える。第3フェーズも論文及び書籍数は比較的高い水準にあるが、2022年以降その件数は減少傾向にあり、その理由については今後詳しい検討が求められる。

(3) 3つの時代区分における頻出語

まず、時代区分ごとの頻出語上位15件抽出した。15件のうち、他フェーズにも上位に出現する語を表3に、各フェーズにのみ出現する語を表4に示す。

なお分析データの前処理として、「実学思想」や「実学的治療」「実学重視」といった、複数の語が共に用いられる複合語を検出し、辞書登録を行なった。

表3に示す通り、すべてのフェーズを通じて高頻度で登場する語はないが、第1・2フェーズを通じて頻出する語に「日本」「虚学」がある。「日本」については、「朝鮮実学と日本」「東アジアの実学と日本」のように、東アジア諸国において、1980年以前から蓄積してきた実学研究の系譜が確認できる。一方「虚学」を含む研究は、源(1980:331)で説明された、「虚学・偽学に対する『内容がある真実の学』(real and true learning)」という、実学の特性から学問を論じるという特徴を持つ。「日本」という語は第3フェーズには頻出語の上位には登場しないものの、「近代日本」のように、語の派生を経て研究の関心が継続されているが、「虚学」については第3フェーズではわずかに登場するのみである。実学が虚学との対比で取り上げられる機会が減少していることがわかる。第1・3フェーズに頻出する語の「実学思想」に着目すると、「朝鮮実学思想の系譜」「福澤諭吉における『実学思想(サイエンチヒックアイデア)』と政治:儒学・蘭学・洋学」のように、実学思想の系譜が研究されたものが多い。ここにも1980年までに蓄積された研究との接合が見られる。

表3 複数フェーズの上位頻出語

抽出後	第1フェーズ頻度	第2フェーズ頻度	第3フェーズ頻度
日本	6	8	
虚学	7	6	
中心	6		10
実学思想	8		9
実学教育		20	21
課題		7	7

なお第2・3フェーズで興味深いのは「実学教育」「課題」という語が頻出する点である。第1フェーズにはごく僅かに見られるのみだった「実学教育」なる語は、福沢諭吉の実学を論じる「慶應義塾流の実学教育」から、「数学教育の致命的な歪を直視しよう：とくに中等教育と（大学での）教養・実学教育について」や「産学・地域連携PBLによる実学教育の試み」のように、各分野における教育実践へと広がりを見せていく。

表4に示す各フェーズにのみ出現する頻出語に着目すると、まず、第1フェーズの特徴として「挑戦」なる語がある。応用物理学会に投稿された「基礎科学者の実学への挑戦」に代表されるように、各学術分野における実学への取り組みという、実学という概念から具体的なプロセスへの移行が見受けられる。また、「実学的治療」や「日常診療」の多くは日本泌尿器科学会雑誌における特集に登場しており、特定の分野における実学の実践的検討の姿勢が窺える。

第2フェーズには「実心実学」が頻出する。実学史およびその思想の系譜がまとめられた上で、「安藤昌益の実心実学思想」「実心実学の発見：いま甦る江戸期の思想」といった特定の思想に焦点が当てられている。一方、「ビジネス」「企業」といった、学術的検討から離れ現場における実学実践のあり方に関心が寄せられ始めるのもこの時期、すなわち2001年以降である。

第3フェーズでは、「実践」「教育」「大学」といった語が頻出する。「実学を実践するアカデミックな場の創出」のように実学を実践する文脈での議論に加え、「海浜をフィールドとした実学教育の実践」や「東北大学の理念としての実学尊重」「中小私立大学の現状と、こんにちの「実学」」といった、個別

表4 各フェーズにのみ出現する上位頻出語

第1フェーズ		第2フェーズ		第3フェーズ	
抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
挑戦	10	実心実学	9	研究	18
実学史研究	9	リハビリテーション	8	実践	16
実学の治療	9	実学者	8	教育	10
問題点	8	学会	7	大学	10
新た	7	ビジネス	6	学問	8
日常診療	7	近世	6	生産現場	8
展開	6	精神	6	開発	7
横井小楠	5	科学技術	5	事実	7
京都	5	企業	5	社会	7
実学主義	5	経営教育	5	評価	7
朝鮮	5	構築	5	融合	7

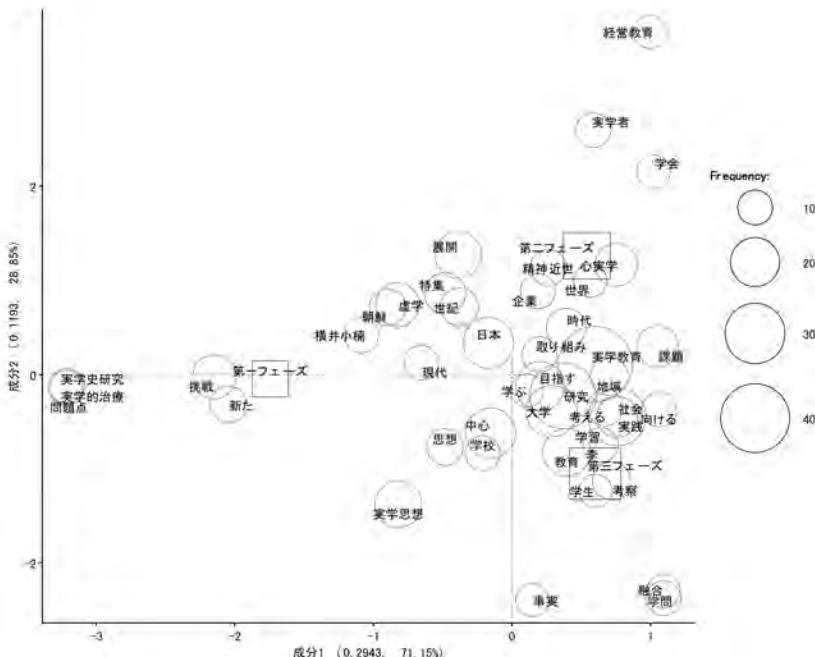


図2 時代区分と対応分析

具体的な教育実践や実学のあり方の多様な方向性が示されている。

(4) 3つの時代区分に基づく対応分析

続いて対応分析を用いて、時代区分による差異を、二次元散布図として視覚的に把握したい。図2は、対応分析によって抽出された最初の2つの成分による二次元配置で、成分1と成分2の累積寄与率は100.0%となった。原点(0,0)から離れているほど各フェーズに特徴的な語として捉えられる。

第1フェーズに特に特徴的な語として、「実学史研究」「実学思想」「実学的治療」があり、1980年よりも前までに蓄積された実学を取り巻く研究の系譜、および個別分野での発展が見られる。第1フェーズは実学史およびその思想という立場からの「実学」検討が一定のまとまりを得て、その先、すなわち個別分野における実学という方向性が示された時期といえよう。

第2フェーズの大きな特徴に「経営教育」や「学会」という語が挙げられる。第1フェーズにおける医学分野の特集と同様に、第2フェーズでは経営教育における実学のあり方が特集として注目を集めた。このように個別分野での実学は学会大会や論文誌の特集といった形で取り上げられる機会を持ち始める。一方で、「実学者」については「朝鮮実学者の見た近世日本」をはじめとする、実学研究に関わりのある研究者が個別に論じられる機会も少なくなく、実学が各分野において実践的広がりを見せる一方で、実学という概念そのものは研究者や実践者といった単位でより深く検討されていくこととなった。

さらに第3フェーズでは「融合」という語が現れる。「融合・両立～基礎と実学の融合／教育と研究の両立」のように、薬学や理学療法といった分野で学問的基礎と実学との融合が模索される。また「学問」という語は、「『学問のすすめ』の成立背景と実学に関する一考察」のように福沢諭吉による実学の検討が蓄積され続けている。

4. まとめ——テキスト分析による概念の時代変化

本研究は、「実学」研究の変遷と学術論文・実践論文の傾向分析を行ってきた。本研究においては、1980年代以前のものは源了圓の著書における整理をベースとし、それ以降、すなわち1980年代以降の実学研究に焦点をあて、時代区分ごとの傾向や特徴を明らかにした。

まず前半は、1980年以降の実学及び実学教育に関する学術論文や書籍を分析対象として、そのタイトルをテキスト分析した。次に後半は、1980年から2000年までの20年間を第1フェーズ、2001年から2010年までの10年間を第2フェーズ、2011年以降現在に至るまでの14年間を第3フェーズとして区分し、それぞれのフェーズにおいて実学及び実学教育にまつわる研究はどのような関心を持って行われたのか明らかにした。

第1フェーズにおける特徴は、1980年までの実学史およびその思想の系譜として積み重ねられてきた「実学」研究の結実、そして個別分野への関心の広がりが見られたことがあげられる。中国北宋時代の儒学者にその発端を得た実学は、「中世の宗教的実在観から近世の世俗的実在観への転換」ということを背景にして形成された学問であり、『現実的』という性格をもつものである（源1980：64-65）。常にそれ以前の学問や思想、価値観の否定を通じて形成され、何を真の実学と捉えるかによって実学の性格も変わってくる（源1980）。実学研究が迎えたひとつの成熟は、その後、個別分野における実学のあり方へと関心を推移させた。それは、実学の「実証性と合理性に裏づけられ、実際生活に役立つ有用な学問（源1986：331）」の有用性へのシフトとも言えよう。

第2フェーズにおける特徴は、実学及び実学教育に関する研究は、現場における実践への推移にある。実学史およびその思想に関する研究は、第1フェーズから続いて実学者各々の深い検討へと進められた。一方、個別分野への実学の関心は、学術的検討の域を超えて現場における実践に向けられ、実学の有用性は実践の成果と結び付けられるようになった。だが、「実学を『実用的な学問』とだけ解釈するのは狭すぎる」と井下（2001：51）も指摘するように、実学の有用性偏重という危険をも孕む傾向とも捉えられる。

第3フェーズにおける特徴は、分野や大学のような、より個別具体的な実学実践への関心であり、その補助線として福沢諭吉に代表される実学者の思想が触れられている。第2フェーズで見られた実学の有用性に対する強い関心は、実学「教育」への視線へと発展し、分野や大学といった単位で実学のあり方が実践と共に議論されるようになった。実学の有用性に対する期待は継続する一方、実践のための教育に関する議論が盛んになり、それらの議論には実学者の思想が援用され、実用性の射程に対するリフレーミングの努力も推察された。

このように、1980年以降の実学及び実学研究は、それ以前の思想の系譜を素地として個別分野に広がりを見せた第1フェーズ、さらに現場における実践に視線を移した第2フェーズ、より個別具体的な実学実践のための実学教育への関心と議論という第3フェーズという時代推移として捉えることができる。実学研究のひとつの帰結は、実学研究の新たな誕生を生み出し、個別分野への広がりと実践へ、そのための教育という流れを作り出したのである。

以上から、本研究において「実学」研究の変遷と共に、テキスト分析を用いた研究論文及び実践論文の傾向分析が可能となった。本研究の学術的意義は、実学研究の関心のトレンド等を網羅的に把握することで、そこから得られた知見を実際の大学教育等において活用できる点にあるといえよう。一方、テキスト分析の対象がタイトルという短いテキストデータであるがゆえに、本研究で達成したのはあくまで大局的な学術的関心の変遷の捕捉に留まっており、実学研究の内容に踏み込んだ分析には至っていない。

今後の残された研究課題は、次の点にある。第一に、実学における、理論と実践、原理と応用、抽象と具体、知識と体験などの相違とその往還やそのバランス等を明瞭にしていくこと、第二に、実学教育における国内の事例収集を行い、教育方法の普遍化や体系化を行うこと、第三に、実学教育を行う上で必要とされる知識や技能等を分析していくこと、第四に、実学教育の学修成果をどう図るか、実学の成果指標の開発を行うこと、などである。以上から、「実学」に原点回帰しながら、実学教育を推進する実践者及び研究者への指針を示していきたい。

本研究は、神奈川大学における2024年度分野横断型研究推進事業である「『実学教育』の実質化による教育的価値創造の原理の構築：具体と抽象とのインタラクティヴァアプローチ」（代表：齊藤ゆか）の議論等をもとに整理したものである。寺嶋正尚・白土由佳は、同プロジェクトのメンバーである。

また上記プロジェクトのメンバーであり、一般財団法人 職業教育開発協会 代表理事の森和夫氏に貴重なアドバイスを頂戴した。記して謝意を申し上げる。

注

- (1) 福澤（1942：12-13）は、「譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条は甚だ多し。地理学とは日本国中は勿論世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見てその働きを知る學問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を證索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行いを修め人に交わりこの世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。」と言及する。
- (2) 同書では「朝鮮」なる用語が使用されているため、本論文でもこれを用いることとした。
- (3) 有賀（2014）pp. 407-408。有賀は同箇所の議論に関し、小川（2006）を参考にしている。
- (4) 本草学とは、中国および東アジアで発達した医薬に関する学問のこと。
- (5) 第一に、寺嶋他（2015）は、当時に勤務校の産業能率大学でアクティブラーニング型授業を実施し、その内容や意義について考察した。また寺嶋他（2015）は、複数大学が参加する大学IRコンソーシアム調査を用いて、学生生活の充実度や大学教育への満足度等に関する研究を行った。第二に、白土（2016）は、当時の勤務校である産業能率大学卒業生の主な就職先企業を対象とし、その企業群に関するソーシャルメディアのデータ分析を通じたキャリア支援のあり方について考察した。また白土他（2017）は、同大において学生のレポート内容と学習状況の関連を類型化し、学生の理解度や関心に応じた学びのあり方について検討した。第三に、齊藤（2022）は、「ボランティア活動成果の見える化」を目指して、CUDBAS手法を用いて「行動変容」に着目した学習実践と評価分析を行った。また、齊藤他（2023）は、『学びの見える化の理論実践』で、企業、行政・非営利組織、学校における「学びの見える化」実践と評価分析を行った。
- (6) NII学術コンテンツサービスサポート「CiNii全般-メタデータ・API」https://support.nii.ac.jp/ja/cinii/api/api_outline（2024年11月7日閲覧）

引用・参考文献

- 吾妻重二（2009）「江戸初期における学塾の発展と中国・朝鮮——藤原惺窓、姜沆、松永尺五、堀杏庵、林羅山、林鷲峰らをめぐって——」東アジア文化交渉研究2, pp. 47-66, 東アジア文化交渉学会。
- 有賀裕二（2014）「渋沢栄一の経済道德と実学の理論的背景」商業論纂55(3), pp. 389-406, 中央大学。
- 井下理（2001）「『実学』再考：教育改革の動向」『行動教育研究』第4集, pp. 47-69, 日本高等教育学会。
- 小川晴久（2006）『実心実学の発見』論創社。
- 小林加代子（2020）「福沢諭吉の学問観——『実学』を捉えなおす——」（総合人間学会第14回研究大会若手シンポジウム報告）総合人間学研究14, pp. 103-112。
- 神奈川大学ホームページ「学園の将来構想」「学園の理念」「100周年に向けた将来像（ビジョン）」<https://www.kanagawa-u.ac.jp/disclosure/future/concept/>（2024年10月24日閲覧）。
- 謝蘇杭（2019）「近世前期本草学における実学思想の考察——稻生若水と貝原益軒を例に——」千葉大学人文公共学研究論集38, pp. 178-196, 千葉大学大学院人文公共学府。

- 島崎隆夫（1965）「近世前期における『経世済民』論の展開：山鹿素行の場合」三田学会雑誌 58 (6), pp. 153 (1)-172 (20), 慶應義塾経済学会。
- 白土由佳（2016）「[「社員による会社評価」クチコミに基づいたワークスタイルの多様性——San-Q ネット掲載企業を対象として——」産業能率大学紀要 36 (2), pp. 19-48, 産業能率大学。
- 白土由佳・吉岡勉（2017）「授業外学習のレポート内容による学生の学習状況類型化」情報センタ一年報 25, pp. 23-27, 産業能率大学。
- 齊藤ゆか（2022）『ボランティア評価学：CUDBAS を用いた評価指標の設定と体系化』ミネルヴァ書房。
- 齊藤ゆか・森和夫・西村美東士（2023）『学びの見える化の理論と実際：教育イノベーションに向けて』勁草書房。
- 高橋恭寛（2022）「『実践知の活用』と『実学』」経営・情報研究・多摩大学研究紀要 26, pp. 23-32, 多摩大学経営情報学部。
- 寺嶋正尚（2015）「『大学 IR コンソーシアム調査』にみる本学学生の学びに関する考察」2 教育開発研究所年報 7 (2014 年度), pp. 13-14, 産業能率大学・教育開発研究所。
- 寺嶋正尚・岡田一弥・都留信行（2015）「産業能率大学におけるアクティラーニング型授業に関する基本的考察～自由が丘スイーツフォレストとのコラボレーション授業～」産業能率大学紀要 36 (1), pp. 73-85, 産業能率大学。
- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——第 2 版』ナカニシヤ出版。
- 福澤諭吉（1942）『学問のすゝめ』岩波書店。
- 源了圓（1980）『近世初期実学思想の研究』創文社。
- 源了圓（1986）『実学思想の系譜』講談社。
- 村越行雄（2009）「実学という名の非実学、そして非実学という実学——大学教育変——」コミュニケーション文化 (3), pp. 32-44, 跡見学園女子大学。
- 文部科学省ホームページ（2024a）（学術研究推進部会・人文学及び社会科学の振興に関する委員会・人文学及び社会科学の振興に関する委員会（第 6 回）配付資料（資料 3）「人文学及び社会科学の振興に関する委員会における主な意見」「4. 人文学及び社会科学と社会との関係について」）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/015/siryo/attach/1343183.htm（2024 年 10 月 26 日閲覧）。
- 文部科学省ホームページ（2024b）（中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・教育課程企画特別部会・教育課程部会・教育課程企画特別部会（第 14 回）配付資料（資料 1）「教育課程企画特別部会・論点整理（案）」）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/1361102.htm（2024 年 10 月 26 日閲覧）。

Transition of Academic Research on Practical Science

Focusing on Text Mining Method of Research since the 1980s

Masanao Terashima, Yuka Shiratsuchi, Yuka Saito

Abstract

This paper focuses on “practical science” and examines “academic research on practical science.” We conducted a trend analysis of research since the 1980s. We divided the period since the 1980s into three phases according to educational reform and conducted a text analysis for the titles of academic research on practical science and considered the changes of practical research. A trend has become clear: from general research on the genealogy of practical thought to research in individual fields, from theoretical research to practical research, and to research on education that realizes practical learning.